

## 鈴木主税の弘化四年「御用日記」

柳沢 芙美子\*

はじめに

1. 宮崎長円家文書における鈴木主税関係資料
  2. 松平慶永付側向頭取の御用日記と草稿
  3. 日記草稿に描かれた慶永のくらし
    - (1) 慶永代の年始儀礼
    - (2) 具足着用
    - (3) 城下巡視・鷹狩り・乗馬
    - (4) 「御鷹の鶴」拝領
- まとめにかえて

はじめに

2014年10月、当館に寄贈された「御用日記」<sup>1)</sup>(写真1)は、幕末の福井藩主松平慶永(1828~90)の側向頭取であった鈴木主税(1814~1856)<sup>2)</sup>が記した1847年(弘化4)の御用日記草稿(手控)で、1月1日から、参勤交代のために江戸へ出立する前日の3月18日まで、2か月半が記されている(一部欠)。大正期の越前松平家の藩史編纂事業の過程で筆写されながら、その後原本の所在がわからなくなっていたものである。

鈴木主税は、1842年(天保13)に寺社町奉行、その後側向頭取、金津奉行等を歴任した福井藩士であり、中根鞆負・浅井八百里らとともに10代の藩主慶永の訓育補佐に尽力した人物として知られている。ペリー来航後の対応をめぐる、水戸藩の藤田東湖や熊本藩の長岡監物等と親交したが、56年(安政3)に43歳で江戸において病死している<sup>3)</sup>。

日記草稿には、有能で人望が篤かった鈴木主税の筆力と、手控えであるがゆえの自在さがあわさって、20歳の青年藩主慶永と側近たちの日常が豊富なエピソードとともに描かれている。一般の関心も高い資料であったため、さっそく当館閲覧室での小展示「若き春嶽の毎日－新発見の御用日記から－」(2014年10月24日~12月24日)において紹介した。

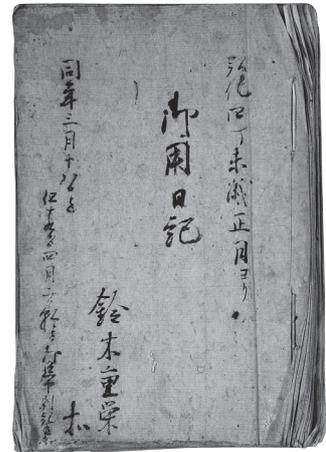


写真1 鈴木主税「御用日記」

\*福井県文書館総括文書専門員

この日記草稿が扱ったのは、90万両の借財をかかえた藩財政再建のために1843年（天保14）から断行された藩札整理は一段落していたものの、なお徹底した儉約と簡素化が進められていた時期であった。初入国（1843年）からいまだ日の浅かった福井での日常のなかで、慶永代の新たな儀礼や定例を模索しようとする藩主慶永と鈴木ら側近の動きをみることができる。

ここでは、まず1において、鈴木の「御用日記」草稿がみつかった宮崎長円家文書の資料群の概要とともに、その他の鈴木主税関係資料を概観し、2で藩庁記録である松平文庫の慶永付側向頭取日記との比較において、この日記草稿の特徴をみてみたい。その後3において、年始儀礼、具足着用、城下巡視・鷹狩り・乗馬、「御鷹の鶴」拝領を取りあげ、この日記草稿がとらえた慶永のくらしをみていきたい。

### 1. 宮崎長円家文書における鈴木主税関係資料

まず、鈴木主税の「御用日記」（資料番号00001）を含む42点からなる資料群、宮崎長円家文書（資料群番号 A0180）の概要をみておこう。宮崎家は福井市内で代々医院を開業する医師である。資料群は収集資料で、箱書きや資料の伝来を解説した手紙等から、ふたつの系統が考えられる。

その一つは、中根鞆負の子孫や鈴木主税の縁戚等旧福井藩士の資料が、仙石亮<sup>4)</sup>（1854-1941、工学博士、鉱山技術者、経営者）の手をへて、その後宮崎為蔵氏（長円氏の父）のもとに伝わったものである。「御用日記」のほか、鈴木主税関係資料、春嶽和歌・同漢文等である。由利公正・三条実美・佐久間象山・緒方洪庵の書状や和歌も、入手先は不明であるが箱書きから仙石亮の手元にあったことがわかる資料である。

もう一つは、戦時下に軍医でもあった宮崎為蔵氏が直接収集した1937年（昭和12）の南京占領の際の「突入決死隊」関連資料、乃木希典・山県有朋・頭山満らの書等である。

先に触れたように、この「御用日記」は、松平家の修史事業の一環として1917年（大正6）5月から11月にかけて謄写されており、この段階では、鈴木主税の縁戚にあたる鈴木茂左衛門家<sup>5)</sup>（当時、吉田郡上志比村）が所蔵していた。これらの写本は「越前史料」として現在、国文学研究資料館に所蔵されている。この写本と照合すると、当館原本では3月5日後半から18日前半までの数丁が失われている。

また、同時に写された「急御道中御内習仮帳」（資料番号00003）は、1846年（弘化3）12月段階で、田安家の父徳川斉匡や、先々代藩主斉承の正室で徳川家斉の娘である松栄院（浅姫）に万一のことがあって緊急に上京する際の対応を詳細に取り決めたもので、実際に48年（嘉永元）6月の斉匡死去の際に出府した時の実績が朱筆で書き込まれている。この資料については、表紙と軸装された本文2丁分のみが残っている（00007・00008）。

ほかに、ペリーがもたらした米国国書への対応について国許での議論をまとめ、家老本多修理とともに江戸に上がった鈴木主税の1853年（嘉永6、年推定）8月6日付け桑山十兵衛宛書状（00006）、ペリー再航の際に戦端が開かれてしまった際の覚悟を語った53年（嘉永6）11月13日付けの書状（00005）がある。

そして「越前史料」には含まれていないが、「福井侯 越州太守御行実」<sup>6)</sup>（内題は「福井侯行実」、

以下この内題で示す、資料番号00002、**写真2**）、および鈴木主税の和歌を収めた「小桜軒詠草」（00009）は、鈴木主税の手元にあった可能性のある資料である。

前者の「福井侯行実」は、半紙二つ折りを綴った体裁で、「御用日記」草稿とほぼ同じ大きさである。写本であり、写した人物「窪廼屋松蔭」については不明であるが、異筆で書かれた表紙が付されている。もとは1847年（弘化4）に儒学者しおのやとういん塩谷宕陰（1809～67）が著わした慶永12歳頃から20歳くらいまでの逸話集で、これを55年（安政2）に写したものである。内容はとくに初入部の際の逸話を多く収め、45年（弘化2）に尾張家を継ぐことになった弟鑑丸に贈った心得書「愚存」等が記されている。

塩谷は、松崎慊堂に学び水野忠精に仕えた後、1862年（文久2）から昌平黌の儒官として修史に携わってアヘン戦争関連の記事を収集、海防論の著作もある人物であった。塩谷からは、橋本左内が江戸遊学中に漢学を学んだとされ、とくに56年（安政3）2月から5月にかけての左内の日記からは、頻繁に塩谷を訪ね会談に参加したり、塩谷自身が諸藩の先進的な学校制度を調査、編集した「学制彙集」等の書物を借用したりしていたことがわかる<sup>7)</sup>。

この資料は「福井侯行状」「福井侯行状聞書」等の名称で内閣文庫をはじめとして、各地に写本<sup>8)</sup>が残されており、松平文庫にも「福井侯行実」<sup>9)</sup>として、大聖寺藩士平井五郎右衛門から贈られたものが伝わっている。

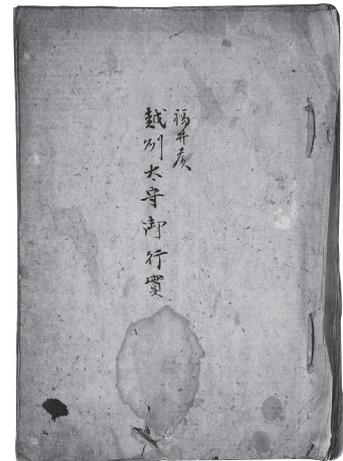


写真2 「福井侯 越州太守御行実」

このことから、慶永初入部のころの名君賢主としてのエピソードが、ほぼ同時代においてすでにある程度流布していたことが推察される。中根頼負も1843年（天保14）頃に「福井鑑と表題して、公の善政美德を称揚し奉りし一卷の書、世に流布セリ。伝聞の謬りなきにハあらねと、十に八九ハ御真蹟を記載」<sup>10)</sup>と述べており、このような逸話集で別の呼称のものも出まわっていたことがわかる。

中根がいうように、この「福井侯行実」にもある程度脚色があると考えねばならないが、初入国時の具体的な逸話として、70歳以上の男女が直接目通りしたこと<sup>11)</sup>、文武修行の詳細な日割<sup>12)</sup>等側近しか知りえない内容を含んでおり、あるいは鈴木ら側近たちが文章に優れていると評判であった塩谷を選んで執筆させたということもありうるかもしれない。

表1 松平慶永付側向頭取の「少傅日録抄」

年 代	表 題 等	請求番号
1838(天保9).9.4 ~ 39(天保10).12.29	「少傅日録抄」(在江戸)	A0143-01106
40(天保11).1.1 ~ 41(天保12).12.29	同 上 (在江戸)	A0143-01107
43(天保14).6.11 ~ 44(弘化1).5.11	同 上 (初入国、在江戸)	A0143-01108
44(弘化1).5.11 ~ 11.2	同 上 (在国)	A0143-01109
44(弘化1).11.3 ~ 45(弘化2).4.5	同 上 (在国)	A0143-01110
45(弘化2).11.1 ~ 46(弘化3).5.12	同 上 (在江戸、着城まで)	A0143-01111

注)「松平文庫」706(M24-2) 福井県立図書館保管。

後者の「小桜軒詠草」については、『越前人物志』に引用されているものの原本と考えられるが、5首多い15首が収載されている。

## 2. 松平慶永付側向頭取の御用日記と草稿

福井藩の藩庁記録である松平文庫には、藩主時代の慶永付側向頭取の業務日記が「少傅日録抄」<sup>13)</sup>として残されており、欠落している期間はあるものの、襲封時の1838年（天保9）9月から46年（弘化3）5月までの6冊（表1）があるが、この日記草稿を推敲・清書した藩庁記録としての業務日記は現存していない。一方、隠居後の1859年（安政6）から68年（慶応4）までの10年間については、「御側向頭取御用日記」16冊がよくまとまって残されている。

側向頭取は、家老を中心とする御用部屋や右筆部屋等で構成される「表方」<sup>おもてかた</sup>に対して、藩主の日常生活に奉仕する「中奥」<sup>なかおく</sup>の側向役所にあつて、側用人や側締役に次ぐ地位にある役職<sup>14)</sup>で、小姓や近習番等の監督や手元費用の管理を職務としていた。

鈴木主税が側向頭取に任ぜられたのは、この日記の2年前、1845年（弘化2）2月9日であった。慶永が藩主となった1838年（天保9）から側向頭取を務めていた熊谷小兵衛<sup>15)</sup>と前波忠兵衛<sup>16)</sup>が、それぞれ43年4月と翌44年（弘化元）8月に隠居・転任したあとには（42年3月から44年5月まで小宮山周造<sup>17)</sup>が見習を務めてはいたが）、浅井八百里（1813～1849）<sup>18)</sup>がひとりで側向頭取を務めていた。その後鈴木に着任から浅井が目付へ転任する46年（弘化3）7月までの5か月間は、浅井と鈴木が同職にあつたことになる。

鈴木「御用日記」草稿とそれ以前の「少傅日録抄」とを比較すると、鈴木「草稿」は特別な儀礼の際の記録を除けば、藩主慶永の日常の行動をはるかに詳細に記述している。

体裁としてはそれまで箇条書きの冒頭に置かれた日付が独立して、天候が加わっている。内容としては起床時刻、診察医師名、慶永の主な行動の詳細とその際の装束、文武修行の内容や相手をした家来、訪問先やそのルート、面会者、食事の場所、饗応の際の献立や接遇の詳細、飛脚の発着や贈答の記録、入浴・灸治、夜詰の頭取の退出時刻等が記されている。

こうした鈴木「草稿」の体裁や内容は、むしろ1859年（安政6）からの慶永隠居後の「御側向頭取御用日記」の書き振りに類似しているといつていいだろう。異なるのは、鈴木「草稿」が慶永の行動を詳細に記録しながら、同時に小姓や近習ら側近の業務記録という側面も併せもっており、側近の失敗や業務の問題点とそれへの対応・調整もあわせて記録されていることである。こうした側面は、慶永隠居後の「御側向頭取御用日記」では大きく後退し、慶永（春嶽）の行動記録という側面が中心となっている。

側近の業務記録の具体的な内容は以下のようなものである。

1月4日、菩提寺参詣の際、大月斎庵前から運正寺前までに魚屋が2軒あり、道幅も狭く臭気等が甚だしい。参詣の節には戸を下させるか、覆いをかけさせるか、町奉行の判断で取りはかるように。

1月5日、（御座所庭の西側にある）土居仏殿拝礼の際、御香の火が消える不調法が、先年に引き続いて発生した。以後は別の香炉に火を入れて持参し、道具役1人が仏殿後ろ口に控えるよう奥

番へ申し聞かせた。

1月16日、御用達の八百屋伝兵衛から献上された初物の若布について、金額の多い少ないにかかわらず、今後新しさを競って差し出すようになってはよくないので、志は深く感じ入るが、受納しない<sup>19)</sup>。

1月17日、御膳番野村権太夫が、前日早朝の掃除の際に休息所の長蛇御飾りを下げるはずのところ失念。春嶽の内意をうかがったところ、問題ないとの思召しであった。権太夫が御礼として罷り出たので、鈴木主税から申上げた。

2月10日、国表では出殿・帰殿の際の対応を、近習番頭取と小姓頭取とのどちらが対応するか、見計いで行ってきたが、鈴木主税が整理して、出殿は近習番、帰殿は小姓持切とすることを双方の頭取に申達。

2月24日、昨夜の御座の間内の灯明から、油煙がことのほか多く上がった。奥之番が道具役を吟味すると油屋が油を取り違えて納品したことが判明。奥之番に道具役を急度叱り申付けるよう指示した。

2月28日、城下廻りの際に、飯島四郎右衛門門下の弓術（大的）の稽古を御覧になった。朝四時（午前10時）頃、御目見以下の者がいても罷り出るよう飯島四郎右衛門に手紙で通知。ただし、内々に鈴木主税から前日に差し支えないかどうか、飯島を取り調べていた。

### 3. 日記草稿に描かれた慶永のくらし

この日記草稿は、利用者の関心にしたがって、たとえば年始儀礼や行事、その際の饗応・装束、儉約策が儀礼や藩主の日常に与えた影響、田安家や江戸屋敷との間の飛脚便の頻度やその内容、城下や在村からの献上品への対応、長寿者への対応<sup>20)</sup>等、多様な利用が可能だろう。ここでは月替展示でも紹介した以下の3点について、「少傅日録抄」の記述と比較しながらみていきたい（概要は、表2参照）。

#### （1）慶永代の年始儀礼

年頭から書き起こされた記録であるため、家臣や隠居・町人・寺社からの年始御礼、諸事初め、菩提所・庭諸社・仏殿・神明宮等への参詣等、年始の諸行事のようすをよく知る事ができる<sup>21)</sup>。元日から2日にかけての記述で、数か所に「巳春同断」「巳春之通り」とあるのは、1845年（弘化2）の事例を指している。この年は、参勤交代で江戸への出立が1月13日となった前年（初入国）に対して、最初の落ち着いた福井城での年始であったため、この時から始められ定例となった行事もいくつか見られた。

たとえば、1845年（弘化2）から慶永によって始められたとされる元日の朝拝（吉方・四方）については、「少傅日録抄」に「方角之儀、今少し吟味スヘキカ」との後筆の朱書があり、方角は翌年には、吉方、南西（伊勢・八幡・京都）、東北（日光）、北、南、西の六方に改められた。鈴木・浅井ら側頭頭取が検討しながら、慶永代の年始儀礼を新たに定めていこうとしていたことがうかがえる。

2日、読初め・書初めが行われた御座所の御座の間の床には、慶永の父徳川斉匡が描いた孔子像が

表2 御用日記の概要 (1月1日～3月5日・18日)

月 日	おおよその時刻	出来事	場所等
1月1日	4:30	諸式(若水、朝拝)	御座所湯殿・御座の間
	7:00	(年始)御礼	本丸御座の間
1月2日	4:30	掃初	
	7:00	鷹据初	
	8:00	(年始)御礼	本丸御座の間
	13:30	乗初	本丸玄関～馬場(馬は黒沢にて、帰りは籠) 本丸鶴の間内使番所の敷居べりに罷り出た役人に「デタカ」、当番の大番組頭に御名有之
	13:30	読初、書初「一元施大化」(高野半右衛門)	御座所御座の間(床の掛物は、田安斉匡筆孔子像)「メデタイ」
		初湯	
	16:30	三献の祝	御座所御座の間
		(大奥書初、買物初、縫物初)	
		飛脚出立	
	1月3日	6:00	(年始)御礼(家老息子、大番・新番格子息、与力・小役人、医師から絵師)
		謡初	
1月4日	9:00	年頭惣参詣	御宮、孝顯寺、連正寺、瑞源寺、森巖寺、灰塚
		魚屋臭気に付側用人へ申談(戸を下すか、覆いをかけるか)	
1月5日	10:00	庭御拝	(宗像宮、宗源殿、稲荷社、土居御仏殿等)
		土居仏殿の御香の火が消えた件、奥之番へ申聞	
1月6日	9:00	(年始)御礼(菩提寺)	本丸
		年越の祝(昼膳)、七種の初爪	
	13:30	稽古初(儒学、兵学、鉄砲、槍、打太刀)	御座所御座の間(床は、孔子像)、御座所稽古所
		福茶 三宝前(大奥)	
1月7日	8:00	若菜の祝(松栄院御使)	本丸御座の間
	8:00	(年始)御礼(隠居、諸町人)	本丸御座の間
		飛脚着(12月24日発) 田安家御製略曆配付	
1月8日	8:00	(年始)御礼(寺社)	本丸
		御台所へ干鱈2枚献上(小丹生浦刀禰茂兵衛、旧例ごとく)	酒・吸物くだされる
1月9日		素読(御透につき)	
	10:00	目付御用有之、御用認物	
1月10日	9:00	常憲院(徳川綱吉)忌月に付御宮参詣	
	11:00	家老御用有之	
1月11日	7:00	具足餅祝	本丸御座の間、鉄砲の間、鞆鞆の間、大広間
1月11日		慶永具足着用、しまいにやってきた井原源兵衛・孫司馬之助拝見	御座所(床は、具足飾り、井原源兵衛が飾付け)
	16:30	福引残りくじ、捨りくじ頂戴(御用達町人、仕立師丸子利右衛門は古格により頂戴)	福引品物飾付け(御座所鉄砲の間)
1月12日		素読	
	11:00	家老御用有之	
1月13日		飛脚着	
	9:00	天方孫八、雨森儀右衛門、市村勘右衛門、横田作大夫、高村長作、小宮山周蔵、側用人ほか任命	御座所鉄砲の間
1月14日	12:00	目付御用有之	
		六日振飛脚出立(年始祝詞)	
1月15日		素読	
		雨森[ ]御機嫌伺、御逢有之	
	11:00	家老御用有之	
1月16日		年越しの祝(昼膳)、大奥御拝、御福茶	
	9:00	朝、小豆粥	
1月17日	9:00	年頭拝領物目録、老女中奉文御覧、家老中はじめ祝儀	本丸御座の間
	夕方	(年始)御礼(中野専照寺、今宿妙観寺、妙海寺、不動院)	本丸
1月18日		御用認物	
	9:00	床飾り・掛物、今朝より平常	
1月19日	9:00	諸稽古はじまり、中庸(松波弥次郎)、鉄砲、素読、槍、打太刀	
	16:00	坊主頭、道具役、時計役、評定所において任命	
1月20日		八百屋伝兵衛、初ワカメ指出すも受納せず	「覚」の写しあり
	9:00	素読(高野半右衛門、通鑑綱目巻42)	
1月21日	9:00	玄成院、大長院、普観寺祈祷	御座所鉄砲の間
	11:00	目付御用有之、天方孫八御用有之	
1月22日	13:30	会読(大学正心修身伝)、弓	
		御膳番、御休息の御飾り長鮑の片づけを失念、不調法	
1月23日		朝御膳(粥、蕎麦切)	
		素読(高野半右衛門)	
1月24日		装束関連覚書(召服規定追加)	
	13:00	初灸	
1月25日		素読(高野半右衛門)	
		飛脚着(1月12日発)	
1月26日	14:00	中庸、柔術、打太刀	
	16:00	素読(高野半右衛門)	
1月27日	15:00	剣術、打太刀	
		小姓相对屋敷替願(思召にあらせられず)	
1月28日		素読(高野半右衛門)	
	10:00	目付御用有之(浅井八百里)	

月 日	おおよその時刻	出来事	場所等	月 日	おおよその時刻	出来事	場所等		
1月21日		御鷹の鴨を浅井を通して用人渋谷権左衛門へ		1月晦日	13:30	中庸 (松波弥次郎)、 劍術			
		近習番、江戸当番割等伺、伺の通り			14:30				
		御鷹の鴨を森六太夫へ		2月1日	9:00	月並御礼	本丸		
	11:00	家老御用有之			11:00				
	14:00	中庸 (松波弥次郎)			13:30			中庸 (松波弥次郎)、 槍術、打太刀	
15:00	槍、打太刀		14:30						
1月22日		御鷹の鴨を鈴木主税へ		2月2日		熊谷小兵衛御機嫌伺、 御逢有之			
		素読 (高野半右衛門)							
	10:00	講談 (前田彦次郎・明石甚左衛門)			9:30			代拝帰り、御目見	
	13:30	中庸 (松波弥次郎)、 弓						飛脚着 (1月24日発)	
15:00			10:00	講談 (前田彦次郎・明石甚左衛門)					
1月23日		素読 (高野半右衛門)			13:30	弓			
	10:00	講談 (井原源兵衛)、 中庸 (松波弥次郎)、 居合、打太刀						年忌進物 (昆布1箱)	
1月24日	9:00	台徳院 (秀忠) 命日に 付、運正寺参詣		2月3日	17:00	会読			
	10:06								素読 (高野半右衛門)
	11:00	家老御用有之			10:00			講談 (井原源兵衛、 出勤次第引揚)、神蔭 流秘伝伝授	「伝授イタシ 大慶ニ存、メ デタイ」
	13:00	目付御用有之 (浅井八百里)			11:00			目付御用有之	
1月25日	夕方	御書認			14:00	中庸 (松波弥次郎)、 居合、打太刀			
		飛脚出立			15:30				
1月26日	9:00	鉄砲、中庸 (松波弥次郎)、 劍術、打太刀		2月4日		素読 (高野半右衛門は 不快欠席)			
	15:00							11:00	家老御用有之 (参勤交 代道中御供人事)
	11:00	目付御用有之 (横田 作太夫)			14:30			多用に付、中庸延引	
	13:30	中庸 (松波弥次郎)			9:00			柔術、打太刀	
1月27日	14:30	槍、打太刀		2月5日	13:30	中庸 (松波弥次郎)、 劍術			
		産穢に付明日から3日 御免小姓頭桑山十兵衛			14:30				
	9:00	運正寺参詣、思召にて 今後今月今日の参詣は 熨斗目枠にて		2月6日		素読 (高野半右衛門)			
	10:09							10:00	目付御用有之 (土屋十 郎右衛門)
	12:30	家老御用有之、野廻り 御供・講談拝聴 (天方孫 八伴葬之助)		12:30	月並養生の御灸				
14:30	弓		14:30						
晩	御用書付類有之に付会 読延引		2月7日	13:30	弓、乗馬				
	素読 (高野半右衛門)			15:00					
1月28日		素読 (高野半右衛門)			17:00	会読			
	10:00	竹内流秘伝伝授						素読 (高野半右衛門)	
		昼、元日拝領の鏡餅 雑煮、蕎麦切		2月8日	9:00	初午に付、御庭稻荷御 拜			
		百歳寿餅1箱献上 (小 稲津村武右衛門、支配 頭より右筆部屋へ指出 し、御用人これを披露			10:00				
	13:30	中庸 (松波弥次郎)			13:00			中庸 (松波弥次郎)、 居合、打太刀	
15:00	居合、打太刀		15:00						
1月29日		素読 (高野半右衛門)				素読 (高野半右衛門)			
		先年酒井外記へ下され 候筆先修正			9:00			用人 (皆川多左衛門、 水谷壹岐、井原源兵衛)、 人払御用有之	
1月晦日	14:30	柔術、会読		2月9日		米歳寿餅1箱献上 (大 御番 休息嶋津波 御目見 御意「息オデ 目出タイ」 茶菓は御座所 初午菓子1包、煎茶	御目見の際の 御意「息オデ 目出タイ」 茶菓は御座所 長炉の間に て		
	17:00							10:00	武田流兵学伝授
	9:00	文恭院 (家齊) 7回忌、 慈本院において茶湯、 装束について覚							
	11:06	家齊下付の印籠を御腰 物方へ預ける 印籠箱へ拝領の経緯を 高野半右衛門へ命じて 漢文で認めさせる							

月 日	おおよその時刻	出来事	場所等
2月9日	13:30 15:00	中庸（松波弥次郎）、 柔術、打太刀	
		一橋家から到来の3 種詰茶1箱を主税か ら秋田八郎兵衛、中 根鞠負、天方孫八へ	
2月10日		素読（高野半右衛門）	
	10:30	家老御用有之	
		今後、出殿・帰殿の際 の対応覚、両頭取へ申 達	出殿は近習番、 帰殿は小姓
		内証御趣意金貸付に 付利息等覚	
	15:00	御書御認に付、中庸延 引	
2月11日	9:00 10:00	清浄院（綱昌）命日 に付運正寺へ参詣	
	13:30 15:30	中庸（松波弥次郎）、 槍、打太刀、乗馬、 二の丸庭廻り	馬は、間之山・ 荒波
2月12日		熊谷小兵衛御機嫌伺	
		素読（高野半右衛門）	
	9:00	普請奉行ほか、任命	御座所鉄砲の 間
	10:00	講談（前田彦次郎・ 明石甚左衛門）	
		飛脚着（2月4日晚発）	
2月13日	14:00 17:00	弓、会読	
		素読（高野半右衛門）	
	10:00	講談（井原源兵衛）	
	11:00	奥之番等申渡	
2月14日	11:00	目付御用有之（石原甚 十郎）	
	14:00 15:30	中庸（松波弥次郎）、 居合、打太刀	ホウボウは白 浜浦献上
		素読（高野半右衛門）	
2月15日	9:00 10:09	月並御礼	本丸
	12:30 17:00	城下廻り（遠的場）	茶臼山鉄砲丁 場 愛宕山（足羽 山）遠的場 荻野助太郎出 迎えに對して 「御意名有之」 終了後、助太 郎へ御意「タ イキ」
2月16日		早飛脚着（9日発、出 水等により逗留・廻り 道、奉書・拝領の鶴お 渡しにあいなり候旨）	
2月16日	9:00	鉄砲	
	13:00	勝手掛天方孫八御用 （人払）	
	14:30	槍、打太刀	
	17:00	奉書・鶴、板取宿到 着の旨注進	
		浅水宿まで到着	
2月16日	19:00	石場問屋まで到着	
	24:00 前	到着、右筆部屋御坊 主受取、二の間中ほど にて繩を切り、油紙を 取り、奉書を箱から出 し、白台へ載せ等受取 儀式、奉書・鶴拝見の 詳細覚	御座所御座の 間違棚前 御意「御奉書・ 鶴拝見タタス 様」御意「アリガ タイ」
2月17日		御礼使者（斎藤数馬）、 御目見奉書は、月番用 人持ち下る 鶴は、御膳番持ち下り 台所預けに	御座所鉄砲の 間 御意「於江戸 表、用人共申 談相動候様、 道中無事デ」
		素読（高野半右衛門）、 遺訓拝読	
2月17日	9:00	狛帯刀、御鷹之鶴拝領 に付、申渡	
	12:30	目付御用有之（石原甚 十郎）	
		御書御認に付弥次郎延 引	
	15:30	弓	
2月18日		魴鮒（ホウボウ）5、2 つ召上、3つ年寄へ	ホウボウは白 浜浦献上
		飛脚出立	
		素読（高野半右衛門）	
2月18日		十文字鑓献上（上関村権 右衛門、河内守国助作）	
		勝手掛天方孫八御用 （人払）	
2月19日	14:00 15:30	中庸（松波弥次郎）、 居合、打太刀	
		素読（高野半右衛門）	
2月19日		拝領の鶴、庖丁仰せつ けらる 舞鶴之手 若森才太夫 丸割 野方鉄次郎 服紗飾り 吉田伝右衛門 後見 伊藤弥五太夫 本役庖丁後、後見が 胴のほか平鉢に盛り、 その後丸割役が胴割、 後見が鉢に入れる	弘化2年2月 18日、江戸表 での事例を参 考に 御座所鉄砲の 御間 まないたの上 へ鶴・庖丁・ 魚料理方は新番 ずとして出 席
		昼膳、鶴を御吸物にて 御頂戴、もつとも酒は 無之	
	13:30 15:30	中庸（松波弥次郎）、 柔術、打太刀、乗馬、 二の丸庭廻り	
2月20日		素読（高野半右衛門）	
		飛脚着（2月12日晚発）	
2月20日		拝領の鶴、松榮院・謹 姫（齊承妹、阿部正弘 室）・貞照院（在江戸） へ5切ずつ進ぜらる	小切れ、くず 身は家老・御 用人・御用人 等へ
	13:30 14:30	中庸（松波弥次郎）、 劍術、打太刀	
2月21日		素読、御相手側向、高 野半右衛門は不快欠席	
	11:00	目付御用有之、内証余 銀利息	
2月21日	13:30 14:30	中庸（松波弥次郎）、 劍術、打太刀	

月 日	おおよその時刻	出来事	場所等
2月22日		熊谷小兵衛御機嫌伺、御逢有之	
		素読(高野半右衛門)	
	10:00	講談(前田彦次郎・明石甚左衛門)	
	13:30 14:30	弓、乗馬	馬は、間之山・黒沢・荒波
		会談は認物のため延引	
2月23日		26日菩提寺招待に付御用人へ申通	
	8:10 17:00	荒川筋、御鷹野で初鷹狩吉野登山、遠眼鏡を背負わせて山上御拝、金100疋内証出 鷹1羽(御脇鷹 御鷹方中村金兵衛)	吉田猪谷村間平方で御膳帰殿途中、院方内村甚兵衛方で御膳・小休あり 道順詳細あり
2月24日		素読(高野半右衛門)	
	10:00	勝手掛天方孫八御用有之	
	11:00	家老御用有之	
		昨夜、御間内油の油煙に付(油部屋・油屋納品取違え)、道具役急度叱り	
		御書御認に付、中庸延引	
	14:30	柔術、打太刀	
	晩	飛脚出立	
2月25日		脇鷹の鷹1 鈴木主税へ酒3升 鷹匠惣中(時節柄緊縮)	
	9:00 17:00	鉄砲、剣術、打太刀、乗馬、会談	馬は、黒沢・荒波
		素読(高野半右衛門)	
		目付御用有之	
2月26日	13:30 19:00	菩提寺を招き、馬事・席画 御馬方乗馬 席画(絵師奈須玄碩) 金200疋(御内証出) 奈須玄碩	運正寺 大安寺 孝顕寺 瑞源寺 天竜寺 花蔵寺 東光寺(御断慈本院) 控室は御座所御用部屋 鉄砲間二の間から御座の間二の間へ、煙草盆・薄茶・生菓子 御意「馬事も申付置候間、庭ヲ寛々見物被致様」 二の丸御馬所、煙草盆・煎茶、大奥より重詰・酒ふたたび御座の間二の間へ御意「ソマツ之掛合ユリト」 夜食献立あり
		せんだって尾州様より到来の枝柿、当番両部屋・奥台所へ下さる	
2月27日	9:06 10:06	運正寺参詣	
	13:00	鞆負、御間内で秘蔵箱の仕訳	
		昨日残りの席画、側用人・主税・六太夫へ下さる	
	13:30	中庸(弥次郎)、弓(暖気に付御的はじめ)、会談は延引	
2月28日		素読(高野半右衛門)	
	11:00	家老御用有之	

月 日	おおよその時刻	出来事	場所等
2月28日	12:39 16:30	御城下廻り桜馬場へ飯島四郎右衛門・弟子の大的(弓)稽古を御覧馬(黒沢)に常袴のまま乗馬	四郎右衛門父子名有之、「今日ハ太儀」道筋詳細あり
		留守中、鞆負、秘蔵箱の仕訳	
		小鮎9 召し上がり(鶴匠共より)	
		素読(高野半右衛門)	
2月29日	12:30 15:00	中庸(弥次郎)、柔術、打太刀、乗馬	馬は、間ノ山・黒沢
	9:00	目付御用有之(浅井八百里)	
3月1日	9:00	城築砂取御覧	鉄砲の間
	13:30	中庸(弥次郎)、槍、打太刀	
3月2日		熊谷小兵衛、機嫌伺、御逢有之	
		素読(高野半右衛門)	
		飛脚着(2月24日発)	
	10:00	講談(前田彦次郎・明石甚左衛門)	
	13:30	弓	
	17:00	本多内蔵助、機嫌伺、二の丸庭廻り	
	8:00 10:00	上巳の御礼	本丸御座の間
3月3日		井原源兵衛、流儀の天授巻申上 金100疋 御内証出	弘化2年3月5日三字伝申上候通、御意「其節ハタイギ」「伝授イタシ大慶ニ存、メデタイ」
	夕	城築砂取御試、弥次郎書物延引	
3月4日		素読(高野半右衛門)	
	10:00	目付御用有之(横田作太夫)	
	11:00	家老御用有之	
		思召をもってありあわせの品、御手目下さる御御用人 秋田八郎兵衛へ同見習 中根鞆負へ ほか	
	13:00	中根鞆負、秘蔵の箱、仕訳	
	14:30	発駕前、本類仕訳等のため弥次郎延引	
3月5日	9:00	柔術、打太刀 昨年は、栗・銀杏であったが大風で吹き落されできず、今年は菓子1包を御相手の面々へ	
		鉄砲	
(以下、3月18日前半まで欠落)			
3月18日		御機嫌伺(腰物奉行)、修復した腰物御覧	
		御庭御拝(宗像宮)	
	13:00	家老御用有之	
		参勤交代関連道中で他家の行列と出逢った際の御簾役へ対応申渡(相手の位に対応し籠の戸、御簾の扱いを指示)	
		側用人秋田八郎兵衛、家老代理として御供、川場・歩行の節心得について、主税まで相談。春嶽のお思召しを伺うと、用事があれば呼ぶので、お呼びがない時は、参上しなくてよい、とのこと。	

掛けられたが、「少傅日録抄」からこれも1845年に慶永の意志で始められ、恒例となったものであったことがわかる。この日記草稿の47年では5枚書いた書初め<sup>22)</sup>のうち、1枚は近例では入れていなかった落款をこの年には施して歳神棚へ、くわえて印章も押したものを父・母（おれいの方）へ1枚ずつ、2枚は残したとある。

6日には、儒学・兵学・鉄砲・弓・鎗・剣術等文武の稽古初めが、御座の間の床に斉匡筆のものではない、「持伝」の孔子像を掛けて執り行われた。

実際に諸稽古が開始される1月16日以降、素読はほぼ連日行われ、高野半右衛門（真齋）<sup>23)</sup>が罷り出て指導している。これとは別に、文武相手役の松波弥次郎による中庸の進講も行われ、1月には8回、2月には12回を数えた。この松波の進講において、いたずらに聴き流して「真剣之討論」を始めようとする慶永を諫めた、この年11月の鈴木建言が知られている<sup>24)</sup>。

## （2）具足着用

1月11日、本丸御座の間において甲冑に供えた餅を頂戴する恒例の具足餅祝のあと、御座所御座の間にもどった慶永は、床に飾ってあった具足を着用した。そこに孫を連れて具足の片付けにやってきた井原源兵衛<sup>25)</sup>が居合わせ、その着用姿の拝見を仰せつけられ、また側用人・用人、帰府のために機嫌伺いにやってきた本多内蔵助もいっしょに拝見したと記されている。

こうした出来事は、どの程度めずらしいことだったのだろうか。

「少傅日録抄」をみると、後述するように慶永13歳で執り行われた具足召初めの儀式以降、1841年（天保12）では具足餅祝の際の着用の記述はない。また42・43年は「少傅日録抄」自体が欠けており、44年（弘化元）も記述はない。そして風邪のため延期され1月15日に行われた45年にも記述はなく、江戸で正月を過ごした46年（弘化3）になって初めて「七半時前、御飾付之緋威御召具足、於御居間被為召候」とある。

日記草稿の翌年、1848年（嘉永元）の具足餅祝の際にも、御座の間に飾った「緋威の御具足」を夕方着用しており、「両三年前より此日にハ、必御座の間へ御荘り付にて、夕方御召試被遊し御事なり」<sup>26)</sup>とされていることから、20歳前後の46年から48年にかけては毎年、具足餅祝の夕方にその具足を着用したことがわかる。

とくに1848年（嘉永元）では、表広間や大奥へも入り、詰め合わせた者たちが拝見している。この際に着用したとされる緋威の具足は、忠昌が19歳で大坂夏の陣で着用したもので、治好の具足召初めの儀式でもこの緋威の具足が使われたという由緒をもつものだった。日記草稿の年（47年）に着用したのも、この忠昌ゆかりの緋威の具足であったと考えられる。

慶永の具足召初めの儀式は、1840年（天保11）9月<sup>27)</sup>に行われ、こののち甲冑の着用は「時間を限り幾十遍と御召試」され、「闇室中之御着具等」少しも支障なくできるようになった<sup>28)</sup>と中根は回想している。そして慶永の甲冑着用の素早さについては、前述した逸話集「福井侯行実」においても次のように採りあげられていた。

御平生、御居間に御具足被差置日々御着被遊候、或時軍学者被為召被仰付候者、具足着用、依流義違ひ可有之候得共、少しにても速成方便利に候間、何も心附候義必無遠慮教示可申旨被仰付、

御着用被為在候処御迅速之義、何れも軍学者一言半句無申上方、深奉驚腹候事

このように甲冑の着用は、青年期の慶永にとってはかなり手慣れたことであり、なおかつ、中根の回想や当時の逸話集にも記されていることから、その迅速さはある程度評判となるほどのものであったと考えられる。

### (3) 城下巡視・鷹狩り・乗馬

1843年（天保14）6月に初入国した慶永が城下や領内を精力的に巡視したことはよく知られている<sup>29)</sup>。この年閏9月には、頻繁に城下廻りを行い端々まで見覚えたいという慶永の意向で、掃除等によって「家職之障り」となることを避けるため、「道筋穢候様之ものは取除可申、其余ハ掃除等不参届儀ハ不苦」<sup>30)</sup>との触れが出された。翌44年（弘化元）7月には、参詣や野廻りも含めて供立ての削減が定められた。

この日記草稿では、2月に入ると15日（城下廻り、茶臼山鉄砲丁場・愛宕山（足羽山）遠的場御覧）、23日（荒川筋の鷹野で初鷹狩り）、28日（城下廻り、城下桜馬場で大的（弓）稽古御覧）を行っている。

いずれもその道筋が詳細に記されており<sup>31)</sup>、23日の初鷹狩りでは、昼食のあとで惣勢を山の下に残したまま、側近らとともに院内村から吉野ヶ岳に登っている。手水・金盥・水次・床几等とともに遠眼鏡を持たせているのは、足羽山でもところどころで眺望を楽しんでいる慶永らしい。山上の御宮を拝し、御内証金から「金百疋」を供した。

割書の注記から、この登山が鷹狩のついでであったため、小休止をとった百姓宅の掃除や杖の準備まで、郡奉行ではなく鳥見頭が担当してとり行われたことがわかる。また翌日、鷹匠惣中へ振舞われた酒6升は、昨秋吉江で行われた初鷹狩りの際と同様であり、緊縮中の折から先々代の例からすればかなり少ないものであったが、側用人と相談して対応したとされている。

「此節花盛り」と記された28日の城下廻りでは、桜馬場で弓の稽古を巡視した後、馬乗袴の用意はなかったが常袴のままで乗馬したと記されている。桜馬場は、福井城の東南、荒川沿いの土居の内側にある馬場で、その名のおり土居に桜が植えられていた。

乗馬は、慶永10代半ばの文武稽古のなかでも、もっとも頻繁に取り組みられた武芸であった（1842・43年の日割で隔日）<sup>32)</sup>。この日記草稿でも2月に入ると8回実施され、中には機嫌伺いにみえた本多内蔵助に対するもてなしとして、夕食前に本丸馬場で自らの乗馬姿を家老らとともに拝見させていた（2月14日）<sup>33)</sup>。やや後のことではあるが、52年（嘉永5）から慶永は城下を乗馬で巡視する「乗のり切」<sup>34)</sup>を始めた。これは不時に実施されることもあり、家老をはじめ家中の持ち馬2、30騎が隊伍し、中根は「此後、在国の定式とされたり」と記している。

なお、この日記草稿には福井城下の正月行事「馬威し」の記述はみられない。「少傅日録抄」で在国の年をみると、1844年（弘化元）1月10日に「佐野内膳屋敷物見へ御立寄被遊、左義長馬御覧被遊」とあり、慶永の家譜や「慶永佐野家の門楼にて之を觀たり」とする『稿本福井市史』の記述と照応できる。翌45年1月14日には、家中の馬に交じって藩の飼馬から栗毛馬1匹が「馬威」に貸し出されており、大奥女中たちは広式用人の取り計らいで城下の豪商荒木方で、御附衆は浅井八百里の周旋

によって奥医師山田敬作方で見物していた<sup>35)</sup>。

#### (4) 「御鷹の鶴」 拝領

2月には、将軍の鷹が獲った鶴を在国中に拝領する出来事があった。16日暁に到着した早飛脚で老中奉書と拝領の鶴が引き渡されたことが知らされ、その日の夕方には板取宿到着の注進、受納の儀式は深夜となった。奉書と鶴が玄関式台から鉄砲の間溜り、そして御座の間に持ち込まれるまでの詳細が記録されている。鶴は床の横に設えた鳥掛けに掛けられた。その後家老・側用人らが拝見し恐悦を述べ、さっそく御礼使者に斎藤数馬が任ぜられたことが披露され、慶永は斎藤に対して「於江戸表、用人共申談相勤候様、道中無事デ」<sup>36)</sup>と声をかけている。

そして3日後の19日、慶永・家老・側用人・用人・目付らが見守るなかで拝領の鶴を捌く鶴庖丁が行われた。本役（「舞鶴之手」）の料理方若森才太夫は烏帽子・素袍姿で、補佐役（「丸割」）と思われる同じく料理方の野方鉄次郎は鬘斗・長袴を着用し、さらに2名が付き従った。どのように切り分けたかについては、詳しく書かれていないが、宮中の作法にならって真魚箸と包丁のみで鶴には手をふれず切り分けたと考えられる<sup>37)</sup>。料理方の装束について、割書で藩の能装束を借用したと注記されているのも面白い。

松平文庫には、この際、御座所鉄砲の間における慶永や家老や側用人、御膳番、料理人等の配置や俎板の位置等を記した、右筆部屋作成の「御座所御間所座配図」（1845年）が残されている。

この鶴庖丁の儀式は、日記草稿によると前年1846年（弘化3）2月の江戸表での事例を参考にしたとされており、確かに同年の「少傅日録抄」には、この際のような図入りで詳細に記録されている<sup>38)</sup>。

慶永家督相続直後、重富の時代1799年（寛政11）以来在府中に拝領していない鶴の下賜を願い出、最初に鶴を拝領したのが1839年（天保10）2月のことであった。46年2月の江戸表での記録でもこの39年の最初の事例が先例として引かれており、この年以來の鶴拝領であったと推測される。鶴庖丁も「料理方修行之為」仰せ付けられたとされている。俎板と庖丁刀は先年（1843年常盤橋屋敷焼失の際）焼失していたため、この時に新調し、本役は39年と同じ森沢五郎左衛門（「千年の手」）であった。「舞鶴の手」「千年の手」がどのような作法なのか、そもそも福井藩の料理方が鶴庖丁の作法をどこから学んだかはよくわかっていない。

切り分けられた鶴肉は、江戸の松栄院・謹姫（齊承妹、阿部正弘室）・貞照院（齊承母）へ5切ずつ贈られ、家老・側用人・用人・側近一統へも小切れやくず身等が振舞われた。骨と胴の羽は残らず黒焼きにして「妙薬」とし、首・両翼は、乾燥させて鶴庖丁の稽古に用いるとのことで庖丁人へくだされたという。

#### まとめにかえて

以上、鈴木主税の「御用日記」草稿の概要を、この資料を含む資料群である宮崎長円家文書とそこに伝わった鈴木主税関係資料の紹介とともに考察してきた。

日記草稿の性格を明らかにするうえで、慶永藩主時代の側向頭取による業務記録「少傅日録抄」との比較が不可欠であったため、必要に応じて引用してきたが、大部な資料であり決して十分な読解と

検討ができていないわけでない。くわえて斉承・斉善等前代の記録との比較ははまだ今後の課題であり、また隠居後の「御側向頭取御用日記」と比較した記述の枠組みや内容の変遷についても同様である。

これまで絵図資料以外の松平文庫のデジタル化はほとんど進んでいなかった。本稿で言及した「少傅日録抄」「御側向頭取御用日記」等、微細な文字で書かれた大部な資料へのアクセスは容易ではなく、このため研究が大きく遅れてきたことは否めない。「少傅日録抄」「御側向頭取御用日記」については、2013年2月の情報システムの更新と所蔵者の越前松平家の御理解により当館デジタルアーカイブでの画像データの閲覧が可能となった。松平文庫全体がデジタル化されより一層活用しやすくなることが求められている。

## 注

- 1) 鈴木重栄「弘化四丁未歳正月ヨリ同年三月十八日迄 御用日記」、宮崎長円家文書 A0180-00001、縦247mm・幅171mm（半紙二つ折り）、48丁。資料目録および画像は、<http://www.archives.pref.fukui.jp/archive/detail.do?id=332461&smode=1>。

翻刻（ドラフト版）は、<http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/08/m-exhbt/20141112AM/1847goyonikki-fulltxt.pdf> 参照。

なお、春嶽公記念文庫（福井市立郷土歴史博物館蔵）のなかに、同様に日次に記された資料「兩少伝日記」がある。このうち第1巻は鈴木主税によるもので、「着城日付日記」という原題の5月12日から23日まで、「日記」と題された（嘉永元年、推定）7月1日から3日まで2点から構成されている。

前半の5月のものは、宛名はないが、仮名を比較的多用していることから女性に宛てた書状と考えられ、また、後半のものは末尾から7月6日付けで「すゝき主税」から大奥老女「磯岡」宛に慶永の近況を伝えた書簡であることがわかる。

磯岡は、1854年（安政元）春の大奥侍女削減の際に隠居したが、「養寿」という名でその後も大奥に仕え、中根靱負から「女丈夫といふへき男口魂の気概あり」と評せられた人物（中根雪江『奉答紀事－春嶽松平慶永実記』1980年）で、1888年（明治21）に茂昭が侯爵となった際の祝宴において「勤労ありし旧臣」のひとりとして中根や鈴木らとともに祝辞と酒肴を供せられている（福井県文書館資料叢書8『越前松平家家譜 慶永』5、2011年）。

- 2) 鈴木主税（450石）は、諱は重栄、純淵または鑿城と号した（福田源三郎『越前人物志』1910年）。
- 3) 『越前人物志』では、鈴木主税の事績として、財政削減のための1854年（安政元）の大奥侍女削減や55年2月の「学校を興し諸士をして就て文武の業を修めしめられしもの専ら重栄の規画」としている。また参勤交代の改革についても「参観（参勤）は三四年一回室家は其領地に遣り還へし、努めて其冗費を省き以て一意兵備を繕はしむべし等、切論せられしもの亦重栄の画策」としている。

こうした『越前人物志』の叙述は、戦後に福井県内で執筆された評伝（児童向けを含む）に引用され、脚色されてきたが、典拠となった資料が明らかではないものが少なくない。また越前史料のなかの、松平家編纂「鈴木重栄伝」（東京在住の鈴木重弘氏所蔵、1917年5月採訪・謄写）も『越前人物志』記述を平易にしたものである。

このうち、資料的な裏付けが得られるものをあげれば、1854年春の大奥侍女削減（20名）については、中根雪江がその困難な過程を、正室勇姫の実家である細川家への内談趣意書や細川家老女からの指出書等を通して詳細に記録している（前掲『奉答紀事』、p151-169）。このなかには、直接鈴木主税の名前はみえないが、鈴木の実歴をみると、「同（嘉永）七寅四月十四日、此度思召を以大奥向御人減御趣法替被仰出候間、右御用掛り被仰付、御近習ニ被指置候間、老女并御広敷御用人申談可被取扱候」とあり、侍女削減に鈴木が職務としてかかわっていたことがわかる（福井県文書館資料叢書11『福井藩士履歴』3、2015年）。

いっぽう、学問所開設についても、「安政二卯正月九日学問所御取建二付、御自分儀右取調掛り被仰付候」とあり、中根も「学問所御取立の思召被為在二付、正月九日鈴木主税ニ取調御用被仰付たり」（前掲『奉答紀事』）としていることから、藩校明道館の創設に鈴木がかかわったことは間違いない。

この年の9月晦日出立して「御内御用」のために江戸に向かっている最中に安政の大地震（10月2日）が発生、上京早々にもっとも信頼を寄せていた藤田東湖の死に立ち会うことになったとされる。『昨夢紀事』では10月1日福井を出立し、木曾藪原で大地震の報に接して、昼夜道を急いで11日の暁に常盤橋邸に到着したとされている。「天英雄を奪ふ又俱に国事を議すべき者なし」と語ったという鈴木徳の絶望は深く、「遂に脳を病み」、翌年2月10日に没した（前掲『越前人物志』）。

また、城下木田の町人が鈴木徳の寺社町奉行時代の仁政に感謝し、生前において世直神祠を創建したとされている（永井環『世直神祠と鈴木主税先生』1931年）。

- 4) 仙石亮は、福井藩士仙石喜熊（万次郎・喜左衛門、25石5人扶持）の子息（前掲『越前福井藩士履歴』3）。
- 5) 鈴木茂左衛門家は、鈴木宇左衛門家（150石）の先祖鈴木多宮を祖とする家で、天和年間に山王村に土着したと伝えられている（「諸士先祖之記（抄）」『福井市史』資料編4、1988年）。
- 6) 1855年（安政2）3月に「窪廼屋松蔭」が写したもので、41か条からなっている。この綴りの後半には、細井平洲の海防論「野芹」も、同じ安政2年3月付けで同じ松蔭によって筆写されている。
- 7) 「安政丙辰（三年）日記」『橋本景岳全集』上、1976年。また慶永は、塩谷宕陰（甲蔵）を呼び時事を討論していた（1858年（安政5）3月5日、前掲『奉答紀事』）。
- 8) 日本古典籍総合目録データベース、国文学研究資料館。
- 9) 「福井侯行実」松平文庫212(M22-28)は、54か条からなっている。
- 10) 前掲『奉答紀事』、p.21。
- 11) 1843年（天保14）「閏九月廿六日御城下廻り御出殿、於東本願寺懸所御城下町人古稀以上之男女三百七十七人御目通江被為召」とある（福井県文書館資料叢書5『越前松平家家譜 慶永』2、2010年）。
- 12) 文武稽古日の記載は、1843年（天保14）在国時の文武修行日割とほぼ一致する（前掲『奉答紀事』p.23）。
- 13) 「少傅日録抄」は、半紙二つ折りを四つ目綴じにしたもので、料紙は鈴木主税の日記草稿とほぼ同じ大きさである。
- 14) 『福井市史』通史編2、2008年。
- 15) 松平文庫の履歴資料からは、熊谷小兵衛は半元服の行事「袖留御用掛り」、具足御召初の御用掛りを務めているが、側向頭取任免は不明（福井県文書館資料叢書10『福井藩士履歴』2、2014年）。
- 16) 前波忠兵衛は、「少傅日録抄」では、慶永が前代斉善の養子となった1838年（天保9）9月4日から熊谷とともに側向頭取として名がみえるが、履歴資料の「剥札」では、側向頭取であったのが確認できるのは、同年10月29日から44年（弘化元）8月28日まで。
- 17) 福井県文書館資料叢書11『福井藩士履歴』3、2015年。
- 18) 浅井八百里は、1843年（天保14）7月22日に「読書御相手」に任ぜられ、翌44年5月23日「御側向頭取見習」、8月24日に前波忠兵衛の跡をついで側向頭取となった。その後46年（弘化3）7月、目付に転出した浅井は、下級家臣である「卒」身分の藩士の人材登用を見越して、その人事管理文書である「新番格以下」（松平文庫926）を約2か月間で仕上げている（吉田健解説、福井県文書館資料叢書9『福井藩士履歴』1、2013年）。また、古書や記録の調査と古老への聞き取りから藩政の先例集「執法全鑑」全28巻を編さんしたとされ、その一部が松平文庫に残されている。

なお、「少傅日録抄」の朱書の一部には「八百里、私云」とする記載で浅井八百里の考察が書き込まれているものがみられ、興味深い。

- 19) 八百屋伝兵衛については、前年46年（弘化3）2月12日にやはり国産の若布を江戸まで送りつけ、献上したいとやってきており、この時は代金を払って買い取っていた（「少傅日録抄」）。
- 20) 日記草稿では、1月28日と2月9日に、家臣の嶋津波静と小稲津村武右衛門からそれぞれ米寿と百歳の長寿祝いとして、寿餅が献上された。この餅は飛脚で2月10日発の飛脚で、父徳川齊匡へ直筆の手紙とともに届けられた。また武右衛門祖父に対しては2人扶持が与えられた（「政暇日録」1847年（弘化4）1月23日条『松平春嶽全集』4、1973年）。

こうした長寿者への対応は、けっして特別なものではなく、たとえば元御付小人磯野平右衛門が献上した米寿餅を召しあがったあと、残りを御附衆等へ下付し、母おれいの方に送った例（「少傅日録抄」1845年（弘化2）

2月9日・10日条)、宮塚仁左衛門祖父の百歳寿餅(実は96歳)の献上の例(「政暇日録」1846年(弘化3)閏5月28日条『松平春嶽全集』3、1973年)等が散見される。前代藩主の「少傅日録抄」や隠居後の「御側向頭取御用日記」全体を見通したうえで、その変遷が検討されなければならないだろう。

- 21) 印牧信明は、福井藩の藩主在国中の年中行事のなかで、1844・45年(弘化1・2)年始儀礼を丁寧に紹介している(「幕末期における福井藩武家の年中行事」福井市立郷土歴史博物館『研究紀要』8、2000年)。
- 22) 慶永の1847年(弘化4)書初め「一元施大化」のうち、2枚が「春嶽公記念文庫」(福井市立郷土歴史博物館蔵)に残されていた。ただし2枚とも落款はあるが印影はなく、日記草稿の記述とは齟齬がある。
- 23) 清田丹蔵に代わって高野半右衛門が1844年(弘化元)から読初めに罷り出、書初めも拝見している(「少傅日録抄」)。高野は、39年(天保10)4月から儒者見習、46年(弘化3)10月に儒者本役、55年(安政2)3月、学問所教授となった(「剥札」)。なお、慶永は38年(天保9)11月以降、江戸では幕府奥儒者成島邦之丞(東岳)、桓之助(稼堂)父子に学んでおり、桓之助子息の甲子太郎(後の柳北)が同席することもあった(前掲「政暇日記」、「少傅日録抄」1846年3月23日条)。

この日記草稿でも近親を亡くした成島桓之助に対して「野菜料」を贈っている(2月24日)。

- 24) 「鈴木主税建言写」『福井市史』資料編4、1988年。
- 25) 慶永は、近親や古老から聴いた福井藩にまつわる逸話を記した随筆『真雪草子』において、熊谷小兵衛と同様に「井原老人」からの昔話を数多く載せており、「井原源兵衛ハ八十二近き老翁にして義経流の師範なり。毎度余の前ニ出て昔話の中に種々面白き事あり」と記している。
- 26) 前掲『奉答紀事』p.84。
- 27) 「少傅日録抄」1840年9月25日条。具足は、福井から井原源兵衛が守護して運び、9月17日頃から準備が進められており、床の間や台子の飾付、会場となった対面所絵図、各藩士の役付、座配、儀式の流れ等が詳細に記されている。
- 28) 前掲『奉答紀事』p.14-15。
- 29) 『福井市史』通史編2、2008年。
- 30) 1843年(天保14)閏9月8日条(前掲『越前松平家家譜 慶永』2、2010年)。
- 31) こうした詳細な道筋の記載は、隠居後の「御側向頭取御用日記」にも引き継がれている。
- 32) 前掲『奉答紀事』p.23。
- 33) 前年秋にも隠居した家臣8名が乗馬を拝見し、菓子を下付されている(前掲「政暇日記」1846年9月17日条)。
- 34) 家譜からは、在国中では1852年(嘉永5)10月3日の本多内蔵助邸への立寄り、56年(安政3)9月3日の文殊山登山が乗切として行われたことがわかる。前掲「山口家譜」には、52年8月15日に「殿様御城下御巡覧ニ付、御乗切ニて御出殿、御供凡三十四五有之、其後も追々有之、馬数七八十又ハ五六十計有之」「先代より無之事故留置」とされ、近年みることのなかった壮観な騎馬隊であったことがうかがえる。豪商山口彦三郎の別家山口十蔵(春雄)の家からそのようすを見た橘曙覧が歌に詠んでいる(「文藻雅集 第一篇」松平文庫1568(仮508))。
- 35) 「少傅日録抄」1845年1月14日条による。ただし、それまで風邪と思われる症状で諸行事を延引し、この日に「清快」した慶永の見物については記載はない。なお、馬威しについては、印牧信明が松平家「家譜」『国事叢記』『続片聾記』『福井藩史話』、「山口家譜」『福井市史』資料編7等をもとに丹念にまとめている(印牧信明「福井城下の正月行事『馬威し』について」福井市立郷土歴史博物館『研究紀要』11、2003年)。
- 36) こうした儀礼の際の藩主慶永の発語は、この日記草稿でも「御意デタカ」「メデタイ」「御意ソマツ之掛合ユルリト」「御意アリガタイ」といった形で複数記載されており、今後の参考のために記録されたものと考えられ、慶永代の「少傅日録抄」にも同様な記載がみられる。将軍が諸大名等と謁見した際の記録「御意之振」を做っていると推測されるが、福井藩におけるこうした記録の変遷については十分検討できていない(福井市立郷土歴史博物館秋季特別展図録『福井藩と江戸』2008年)。
- 37) 西村慎太郎『宮中のシェフ、鶴をさばく』2012年。
- 38) 「少傅日録抄」1846年2月18日条。